

# 現代の祇園祭に関する研究動向

## —京都祇園祭山鉦巡行の運営について—

### A Survey of Contemporary Kyoto Gion Festival

#### — Focusing on the Management of Yamahoko Parade —

花 川 真 紀

#### 要 旨

祇園祭をはじめ、現代日本の多くの祭りが担い手不足の問題に直面している。新規住民や企業との新たな関係構築も一つの継承方法とも言えるが、祇園祭の運営には現在、大学生のボランティア・アルバイトの存在は欠かせないものとなっている。地縁による伝統継承には限界がある。本論では、祇園祭の山鉦巡行の運営について今日までにどのような研究がなされてきたのか、その研究動向を整理した。その結果、町内外にこだわらず、「毎年継続して参加する」、「運営に関する心得がある」の2点が明らかになった。

キーワード：都市祭礼、山鉦巡行、祭礼運営、担い手問題

## 1. はじめに

現代の日本における祭りでは、その多くが担い手不足の問題（以下、担い手問題と表記）に直面している。京都の「祇園祭」も、日本三大祭の一つにあげられるほど大きな祭りではあるが、同じように担い手問題を抱えている。祇園祭の起源は「祇園御霊会」とよばれるものであり、貞観5(863)年、疫病が流行し多数の死者が出たことから、神泉苑にて朝廷主催の御霊会が盛大に行われたことが記されており、文献に登場する御霊会としては、これが初出である（八木 2015：21-22）。以後、応仁の乱(1467～1477年)やいくつかの大火などにより、たびたび中断しつつも、変容、復活を経て今日まで続いている。

祇園祭において重要な行事として「神輿渡御」と「山鉦巡行」が挙げられる。山鉦巡行についてだが、本来鉦や山は厳粛な神事である神輿渡御の先触れとしてのパレードであった。やがて独立し、いつしか神輿が出なくても鉦や山の巡行だけは行われるという事態になっていった（八木 2018:30-31）。山鉦巡行は町衆によって運営されており、応仁の乱以前には、すでに現在の巡行に近い形態で行われていた。筆者は、町内ごとに展開され、その町内ごとに運営の特色が見られる山鉦巡行に着目し、現在、どのような人々が、どのような立場から祭りの運営に関わっているのか、また、その担い手についての研究を進めている。

現代の祇園祭の運営形態に関する研究をするにあたって、現在までにどのような研究がなさ

れてきたのかの研究動向についてまとめる。「都市祭礼」の研究がいつ頃から盛んになったのかを調べ、また、今回の研究対象である京都祇園祭の山鉦行事の運営に関する研究の動向を探り、今後の研究に活かしたいと思う。

## 2. 都市祭礼について

祇園祭の研究は数多くあるが、祭礼の運営に関する研究を行うにあたり、今回は「都市祭礼」に注目する。

谷部真吾（2011）は祭礼研究の軌跡についてまとめている。それによると、柳田國男によって「祭礼」の定義がなされたものの、関心を持たれることがなかったと述べ、さらに福原敏夫の研究を引用し、日本の都市祭礼研究は1960年代末から1970年代にかけて本格的に始まったと主張した。なかでも、中村孚美と米山俊直によって日本の祭礼研究は切り開かれ、1990年代初頭、祭礼研究はひとつのジャンルとして確立したとされている（谷部 2011：64）。

さらに、谷部は都市祭礼というジャンルで確立された研究の意義を深く考え直す時期に来ているのではないかと主張している。筆者も都市祭礼の視点から、山鉦巡行の運営形態についての研究を行うが、研究を行う意義を明確にする必要がある。そこで注目したのが中野紀和（2005）の研究である。

中野も同様に祭礼研究史についてまとめている。また、中野は福岡県北九州市小倉北区でおこなわれる小倉祇園太鼓を事例に挙げ、そこに集まる「有志集団」についても取り上げている。中野によれば、「有志集団」はミル側からスル側へと移行してきた有志によって結成されるチームである。この有志チームは民俗学が伝承母体を論じる際に、その対象としてこなかった層である（中野 2005：212-213）。

この有志の存在は現在の都市祭礼には欠かせない存在になるのではないかと、筆者は考え

ている。中野の祭礼研究では、「民俗学において祝祭を論じた研究は少ない。」（中野 2005：204）と述べられている。また、中野は、「都市祭礼研究は現代社会をより強く意識して論じる方向性を有している」（中野 2005：209）と主張している。都市祭礼は現代社会を対象とするところに研究の意義があるのではないだろうか。

## 3. 米山俊直の祇園祭研究

都市祭礼の領域における祇園祭の研究において、米山俊直の研究（米山 1947：米山編 1986）は外すことはできない。

米山は1973年からの3年間と、1983年からの3年間、つまり10年間の間に2度、祇園祭の研究を京都大学の「文化人類学実習」を履修している学部生と大学院生らとともにいった。1973年の研究では、「祇園祭'73」と名付けられたプロジェクトの下、「町衆班」、「見物班」、「だしもの班」、「本質班」の4つのグループに別れ、それぞれ調査をおこなっている。当時、これほどまで丁寧に行われた研究はなく、当時の山鉦町の様子や、当時まだ復活していない休み山への調査、さらにはその年に出ていた露店までもが丁寧にまとめられている。

祇園祭の研究を通し米山は、「このように参加者には役割や立場や見方の相違があり、ときにはそれが対立や緊張の関係をふくみながらも、それ自体が祭のムードをつくる要素になって、ともかく祭が進行してゆく、ということだ」（米山1974：191）と述べ、さらに、次のように指摘する。

「自分たちが出なければ、この祭は動かない——という考えを、この祭に関わるほとんどの人がもっている。はっきりそういう人もあれば、つつしみぶかく“仕方なしにやっています”という人もある。しかしいずれにせよ、自分がやらなければ、という誇りがみん

なにある。」(米山 1974:192)。

町衆、見物人、警察官など、さまざまな立場の人々が祭りに関わっており、祭りにかける思いもさまざまだが、決まってみな祭りを「自分のこと」として捉えていることが、これほどまでに大きな祇園祭を成立させている要因であると述べている(米山 1974:191)。

また、現代の都市祭礼運営の特徴として、次のように主張する。

「都市がかつてのように一旗あげる出稼ぎの場ではなくなって、終生の生活の場であることがしだいにはっきりし、錦を飾るべき故郷はもうなくなってしまったために、都市の祭礼はあらためて見なおされるようになった。それも従来<sup>1</sup>の氏子と神社、檀徒と寺院の関係ではなく、たとえば神輿をかつぐボランティア・グループのような、まったく新しい意味での参加者が生まれ、地方で傍観者・観客・見物人としての祭礼に関わる人びとも出現した。それによって、まったく新しい意味が、都市における新旧の祭礼行事・催事に付け加えられることになった。」

(米山編 1986:iv)。

1983年から3年に渡る研究では、地縁的な繋がりだけでの運営ではなく、ボランティアをはじめとした「まったく新しい意味での参加者」の存在の重要性を訴えている。アルバイトや、ボランティアの存在のような一時的な人手ではなく、毎年必ず祭りに参加する運営に精通した人物の育成を町内にこだわらずに育成するべきである(米山編 1986:50)と改めて主張していることから都市祭礼における担い手問題の重要性が伺える。

#### 4. 現代の祇園祭の運営に関する研究

米山の研究でも取り上げられていたように、現代の祇園祭の運営には「まったく新しい意味での参加者」(米山編 1986:iv)が生まれている。ここで注目されるべきところは長い歴史と伝統を持つ祇園祭が「まったく新しい意味での参加者」の参入によってどのような影響を受けているのか、ということである。新しい参加者は地縁的なつながりを持たない場合もある。

谷直樹と増井正哉は次のように指摘する。

「町内会が町に居住する人びと(世帯)によって構成される「地縁」的な組織であるとする<sup>2</sup>と、保存会は山や鉦、そして町会所を維持し、祭りを執行するためにつくられた組織で、いわば「祭縁」<sup>まつりえん</sup>にもとづく。」(谷・増井 1994:64)。

この「祭縁」という言葉を使い、祇園祭の運営に関する研究を行っているのが樋口博美(2012)である。樋口は谷と増井の「祭縁」という言葉を用いて町内からなる地縁的な集団だけでなく、祭礼に関与する町外の人々にも焦点をあて、何を契機に祭縁を形成するのか、祭礼を実現、維持するに当たっての両者の関係についての研究している(樋口 2012)。

樋口は、山鉦祭礼に関わる人々を①祭りへの関わり方、②空間、③時間、④伝統の4つにわけ、考察し、それにより祭礼を企画・執行する人々と、技能によって実働する人々に分けられるとした。

分析の結果、「構想と実行の二つの祭縁が相補的に結ばれ、統合されることによって山鉦祭礼は実現するのであり、これら二つによって成り立つ関係を都市的祭縁と呼んでおきたい」(樋口 2012:123)と結論付けた。

さらに詳細に山鉦町の運営形態について研究したのが、山田浩二(2016)である。祇園祭の山鉦巡行に関する運営形態の変容、現在の運営体制についてまとめており、祇園祭が今日まで

運営を継続できたのには4つの要因があるからだと主張した（山田 2016）。4つの要因とは、以下の通りである。

①運営主体の変化と新たなシステムの形成。

運営主体が従来の町衆から山鉾保存会に移り、祇園祭山鉾連合会が祭全体を統括するシステムが形成されたこと。

②政府による補助制度の整備。

京都市は有形文化財への補助だけではなく、無形文化財の補助もするようになった。また、京都市だけではなく、京都府からも補助が出るようになった。

③祭りのボランティアの参加。

「京都祇園祭ボランティア21」は山鉾巡行の曳き手のボランティアを安定的に供給する体制を作った。ボランティアへの依存が高くなり、山鉾巡行に大きく貢献している。

④山鉾町の自助努力。

町会所を賃貸として貸し出しや、ちまきや授与品の販売の強化によって祭の費用の一部を賄っている。

以上の4点に加え、祭りを守っている人達の心・「意地」もあげている（山田 2016：74-75）。

これらを踏まえて山鉾巡行が今日なお持続可能なのは、「自助（山鉾保存会を中心とするソーシャル・キャピタルと収入獲得努力）、公助（政府による保護・補助金）及び共助（ボランティア供給組織の確立）を統合するシステムが構築されたからだ」（山田 2016：76）と結論付けた。

## 5. 現代の山鉾巡行の運営組織

以上の先行研究を踏まえ、現代の山鉾巡行の運営組織に関する研究の展望を述べる。

2018年現在、前祭23基、後祭10基が巡行に参加している。山鉾の町内社会を管理運営してい

るのは町内会や自治会である。一方で山鉾巡行や祇園祭の運営を直接担うのは山鉾保存会と各山鉾町を取り仕切る山鉾連合会である。33基の山鉾の運営は各山鉾町の運営によって独立されている。山鉾連合会は1923年に設立された。各山鉾町の統括組織であるものの、各山鉾の運営に関する権限は持ち合わせていない。

山鉾巡行は町衆が主体となって運営されてきたが、明治以降の財政難をきっかけに「山鉾保存会」と呼ばれる組織が町ごとに作られた。保存会は山鉾維持と祭礼運営のみを目的に、山鉾町ごとに組織された町内の団体である（樋口 2012）。保存会は結果として町内の人々が多いが、祇園祭の山鉾巡行行事を遂行するという目的が達成できれば保存会という組織自体は地縁にこだわる必要はない組織である。

保存会の下にはさらに鉾の組み立てを行う作事三方、囃子方、曳手、舁手をはじめとしたボランティアが祇園祭の運営に携わるが、山鉾町ごとに規模は違い、運営形態にも違いが生まれる。

米山が主張した新しい参加者に関する研究は、佐藤（2016）の研究での函谷鉾、橋弁慶町、白楽天町、蟬螂山町他の事例や、野口（2013）の研究での鯉山町の事例を始め、数多く存在する。しかし、いずれも町内に構える企業との関わりや、賃貸マンション・分譲マンションをはじめとした「新規住民」との関わりに関する研究がその多くを占める。これらの研究はあくまで町内に何かしらの縁がある人々の研究である。

## 6. 山鉾巡行におけるボランティアの存在

現代の祇園祭、山鉾祭礼における運営の研究は新規住民あるいは、町内にある企業との関わりの現状に関するものが多い。しかし、現在の祇園祭において同じくらい欠かせない存在がボランティアである。とりわけ、大学の多い町で



ある京都は特定の鉦町と大学が関わりを持つというケースも珍しくはない。

また、祇園祭には山鉦巡行の際に安定的にボランティアを供給する組織として「京都・祇園祭ボランティア21」が存在する。これは山鉦連合会を通して委託するボランティアだが、佛教大学と綾傘鉦のように特定の大学と連携するにせよ、上記の組織にせよボランティアに対する依存度が高く、今日における山鉦巡行において彼・彼女らの力は欠かせない。

ただし、ボランティアの存在だけでは、米山の主張する、毎年祭りに参加する運営の心得のある人材の育成は実現されない。必要なのは鉦町に組織として入り、保存会の一員として継続的に関わっていく人材の育成、環境整備である。

## 7. まとめ

現代の祇園祭の研究をするにあたって、都市祭礼と祇園祭の研究動向を整理した。今後、研究を進めるにあたって現代の社会状況に沿った祭礼研究が重要であり、担い手問題は多くの祭りが抱える重要な問題であると筆者はあらためて認識した。さらに、米山と山田の研究を検討し、新しい参加者の受け入れが町内にこだわらず必要であるということに加え、祭りを自分事として捉えることのできる人材こそが、担い手として評価されるということが明らかになった。

現代の祇園祭の研究においてボランティアに特化した研究はほとんど見受けられない。では、このボランティアの存在が、担い手として認定されるにはどうしたらよいのか。米山の研究に基づいて考察すると「毎年継続して参加する」、「運営に関する心得がある」ことである。それが、先に主張した保存会の組織に入り、継続的に関わるボランティアの性質を持った人々になる。

## 8. 今後の研究について

筆者が、これら二点の条件を満たしていると考える組織がある。筆者が調査・研究している「綾傘鉦」を有する「綾傘鉦保存会」である。綾傘鉦のある京都市下京区善長寺町は、東を室町通、西を新町通に面する綾小路通を挟んで南北にまたがる両側町である。綾傘鉦保存会には「青年部」とよばれる組織がある。この組織は、佛教大学の卒業生、現役学生によって構成されている。彼・彼女らは佛教大学でかつて授業内のボランティアやインターンシップ、あるいは最初は佛教大学の八木透氏の教え子で手伝いとして綾傘鉦の運営に関わっていた人々である。

ボランティアとしての参加は、ちまき作りや、宵山期間、巡行当日の必要な日程のみの参加であるが、その参加を通して青年部に入部した者は運営により深く関わっていくことになる。青年部の組織のようなボランティアから派生した組織が保存会のなかに所属し、継続して運営に関わり続ける事例は他の鉦町ではおそらく見られない貴重な事例である。今後の研究では、保存会に所属する町内の人々から祭りの担い手として認められた彼らについて調査していく。

## 参考文献

- 鯨坂学・小松秀雄 2008 『京都の「まち」の社会学』世界思想社
- 佐藤弘隆 2016 「京都祇園祭の山鉦行事における運営基盤の再構築—現代都市における祭礼の継承—」人文地理 第68巻第3号, 273-296。
- 谷直樹・増井正哉 2009 「都市祭礼としての祇園祭—町から都市へ—」谷直樹・増井正哉 編『まち祇園祭すまい—都市祭礼の現代—』思文閣出版
- 中野紀和 2005 「祭礼研究の現在—祭礼と都市祭礼—」現代伝承論研究会編『現代都市伝承論—民族の再発見—』岩田書院, 203-224。
- 野口奈那 2013 「京都市中心部における伝統行

事の運営システム—鯉山町を事例として—」『京都民俗』第30・31号, 京都民俗学会, 175-189。

樋口博美 2012 「祇園祭の山鉾祭礼をめぐる祭縁としての社会関係—祭を支える人々—」『専修大学人間科学論集 社会学編』2(2), 専修大学人間科学学会, 113-125。

八木透 2015 『京のまつりと祈り—みやこの四季をめぐる民俗—』昭和堂

谷部真吾 2011 「祭礼研究の軌跡—中村孚美と米山俊直の祭礼論を事例として—」『Hersetec = テクスト布置の解釈学的研究と教育』SITE2 5(2), 43-66。

山田浩之 2016 「新しい共同性を構築する場と

しての祭り—祇園祭にみる祭縁の実態—」山田浩之編『都市祭礼の文化の継承と変容を考える—ソーシャル・キャピタルと文化資本—』ミネルヴァ書房, 46-81。

米山俊直 1974 『祇園祭—都市人類学ことはじめ—』中公新書

——編 1986 『ドキュメント祇園祭—都市と祭と民衆と—』NHKブックス

(はなかわ まき

佛教大学大学院社会学研究科修士課程)